令和５年度　　自己点検・自己評価表

大阪成蹊短期大学附属こみち幼稚園

１．本学の建学の精神

“桃李不言下自成蹊”　　とうりものいわざれどしたおのずからこみちをなす

「成蹊」の名称は、中国の司馬遷の『史記』に由来しています。「桃や李（すもも）は何も言わないが、その美しい花や実にひかれて人が集まってくるので木の下には自然と小道（蹊）ができる」という意味であり、徳が高く、尊敬される人物のもとには徳を慕って人々が集まってくるというたとえ。

２．本園の教育目標

強く　明るく　考える子ども

３歳児　　喜んで　幼稚園へ来る子ども
４歳児　　友だちと　なかよく遊べる子ども
５歳児　　力いっぱい　遊びやしごとをする子ども

３．今年度重点的に取り組む目標

１．教育活動

① 幼児の立場から

幼児が自分らしく、生き生きとして日々を過ごし、自己充実できるよう努める。

そのためには、まず、日々の生活の中での幼児の実態を見つめ、何が課題と考えられるのか、また保育をする上で何が求められているのかを見極めていく。さらに、幼稚園教育の基本である環境構成を考え、どの幼児にも分かりやすい・使いやすい等の優しい環境であることに重点をおく。幼児と共に生活を創り出す保育実践に努めていく。

② 教職員の立場から

幼児が安心して思う存分に遊べる安全で豊かな環境構成に努め、幼児の主体性が育まれていく保育の教材や遊具を幼児の実態を把握し準備していく。更には、一人ひとりの幼児がもっている個性や発達の特性を見極め、教員間の連携を密にし、情報共有や共通理解しながらその幼児に合った指導を行うことを基本とする。各クラス週案をもとに日々の保育活動を行う。特に「運動あそび」については、「運動あそびカリキュラム」に沿って環境構成を意識して取り組み、改善を加える。

２．教員研修

①　園内研修

各担任が、幼児の実態から自ら研究テーマを決めて、日々の保育活動を工夫して記録としてまとめ、園全体で共有し、園内研修を行う。引続き「運動あそび」は、年間カリキュラムのもと、教員間で協議を深め、動画撮影を行うことで実践を振り返り、改善点や改善の方法について考え系統的に運動能力の育成を図る。また、公開保育を行い、大学や短期大学の教員の指導・助言をもらい保育の質を高め教員の資質の向上を図る。

②　教育課程、指導計画の見直し

幼稚園教育要領の趣旨を理解し、趣旨を踏まえた視点から教育課程・指導計画を見直し、改訂を行い、実践していく。

３．大学・短大との連携

学部、学科との交流をより活発にしながら、各々の専門性を保育に取り入れ、幼児・保護者・教員の豊かな学びに繋げていく。また、教育学部幼児教育コースと幼児教育学科の教員と協力した「保育研究会」を実施し、幼児理解をより深めると共に、公開保育を実施し、よりよい保育を追求する。教育実習生を受け入れ、次への保育者を育成する。課内活動・課外活動において大学・短大の教員が講師を務める。大学教育学部幼児教育コースＰＢＬ授業に協力する。

４．安全管理

アルコール消毒、うがい、手洗いを引続き行い、安心・安全な保育を第一とする。保育室や遊具等の園内施設の安全点検を定期的に行い、安全意識を高めて幼児の安全確保に努める。また、１ヶ月毎に避難訓練を行い、保護者との共通理解や連携を深め、いざという時には冷静にすべての幼児の命を守れる体制をつくっていく。大雨による河川の氾濫等の水害の際には、近隣小学校への避難の協力を引続き依頼し、訓練を行う。

４．評価項目の達成及び取り組み状況　　（評価結果はＡＢＣの３段階評価としています）

評価項目		結果	取り組み状況
Ⅰ	教育活動 ① 学園の建学の精神や、園の教育目標を踏まえ、幼児が主体的に、生き生きと充実して生活できるような保育の創造と実践に努める。 ② 幼児の発達や育ちの姿を適切に読み取り、どの幼児も安心して遊べる、一人ひとりに寄り添った関わりや環境構成を考える。	A	**取り組んできたこと** 新型コロナウイルスの扱いが変更になったことで、宿泊保育を実施し、園で宿泊を行った。運動会においては、大人の観覧の人数に制限を設けずに実施した。参観については、学年で二日間実施し、密を避ける工夫もしながら親子で活動を行う内容を取り入れた。引続き、安心・安全な保育を第一とし、消毒・手洗い・うがいは継続して行い感染防止に心がけてきたが、インフルエンザや胃腸炎等の感染が広がり数クラスで学級休業があった。親子遠足、秋の遠足も実施することができた。。 保護者と園との連絡方法に ICT 化支援 WEB システムを活用し、事務の効率化を図った。 **今後の課題** 新型コロナウイルス等を含む感染症の防止対策は、引き続き行いながら、これまで実施してきた行事を同様に実施することとするが、今後の状況を見て、決定していきたい。 ICT 化支援 WEB システムをより保護者に利用しやすいシステムになるよう検討していく。新たに「インスタグラム」を立ち上げ、新入園児獲得のために積極的に情報発信を行っていく。 **具体的な取り組み方法** 毎日の保育は、子ども達が主体的に取り組める工夫ある環境構成を行っていく。「運動カリキュラム」に沿って活動を行い効果測定を行う。講師を招いた園内研修の実施や園外研修にも積極的に参加し、園全体の保育の質を高めていく。新たな研究テーマを設定し、研究を進め、公開保育を行い、教員相互の力量を高めていく。平素より計画的な保育を行い、特に大きな行事については、しっかりしたねらいのもと時間のゆとりをもちながら活動を行っていく。 ICT 化支援 WEB システム「Brain」の有効活用を行い、保育研究に取り組む時間の確保を図っていく。あわせて「働き方改革」を意識し、充実した働き方になるように「チームこみち」を意識し、風通しのよい職場環境づくりを図っていく。主任会議を行い、教員の思いを反映し、よりよい園運営につなげられるようにする。業務改善を常に意識し、できるだけ早く退勤できるように意識して業務に取り組む。 「インスタグラム」を活用して、本園の保育の質の高さを発信し、新たな園児獲得につなげていく。 **取り組んできたこと** 幼児一人ひとりの興味や関心を捉えながら、主体的に取り組めるようにその年齢に合った素材や遊具等の準備をしていった。週案を立て学年で保育内容の共通理解や子どもの実態についての情報交換を行ってきた。個別に支援を必要とする幼児に対しても、教員間での連携を細やかにとり、望ましい支援の方法を考えることができた。また、幼児教育学科の教員や私立幼稚園連合会から派遣された臨床心理士の園児観察からアドバイスをもらえた。すべての幼児に分かりやす

			く、扱いやすい視覚支援などユニバーサルデザインの掲示物や備品を活用することができた。新たに音楽を通じて子ども同士がつながる力を育成するねらいをもって、年中の１クラスで短大教員と「ミュージックコミュニケーション」の活動を行った。また、子ども達がさまざまな運動遊びに取り組めるように環境を整え、自主的な外遊びを促した。 **今後の課題** 幼児一人ひとりの育ちを読み取る力をつけていくためにまた、個別の支援を必要とする子どもが増えてきている現状から短大教員の指導を仰いだり、研修を受講し、日々の保育に活かせる力量が必要。また、経験の浅い教員の保育力を高めるために園体制で取り組むことが重要である。 **具体的な取り組み方法** 週案に沿って、学年で共通理解のもと保育活動を行っていく。「幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿」の振返りを行うことで、幼児の主体性が育まれる保育を実践していく意識を高める。短大教員や大阪市特別支援教育相談事業での臨床心理士からの見立てから適切な支援方法をまなび、共通理解していく。各学年１クラスにおいて、「ミュージックコミュニケーション」の活動を短大教員と共同で行う。経験の浅い教員が先輩教員から幼児のとらえ方や保育技術を学び園全体の保育力を高めていく。また、学年や園全体で保育活動の相互交流を行い、経験豊富な教員から若い世代へ経験値を伝えていく。初任者３名を各学年主任のクラスに配置し、保育力を高める。園内研修の充実や園外研修にも積極的に参加し、自ら学ぶ姿勢を高めていく。
Ⅱ	教員研修 ① 園内研修の充実 研究テーマの視点から、幼児の姿を捉え、実践事例研修として協議を行い、幼児理解を深めていく。	A	**取り組んできたこと** 各担任自身が、各クラスの実態から研究テーマを定めて、1年間の保育活動と子どものようすについて効果検証を行い、園内研修で報告を行った。また、「運動あそび」については、日々の保育の中で保育室や園庭で活動を行ってきた。大学、短大教員と年２回の「保育研究会」を実施し、11 月には公開保育を実施した。子どもの運動あそびの様子を動画におさめ、年度末に研修会を行った。その結果、系統的なカリキュラムを充実させることができた。 外部研修は、大阪市私立幼稚園連合会や大阪府教育庁が主催する研修講座に可能な限り参加をすすめ、対面研修や Web 研修等で参加することができた。 **今後の課題** 運動あそびについて、研究を重ね、カリキュラムの変更も行ってきたが、日常の保育の活動に取り入れられているかが課題である。また、園児の実態を共通理解しながら系統的な活動になっているのかも検証していく必要がある。また、受講した外部研修の園全体への還元を行う時間設定ができていない。時間の確保が必要である。 **具体的な取り組み方法** 引続き改定した「カリキュラム」の実践を行い、各クラスで「運動あそび」についての考察と取組を行っていく。普段の子どもの生活の中に自主的に身体を動かすことが定着していってほしいと考える。また、園内研修の充実を図り、個別支援のスキルも上げていく。経験の浅い教員の資質向上のために on the job を意識して平素から経験値を伝えていく。また、新たなテーマで研究をすすめ、保育研究会を開催し、

	② 教育課程・指導計画の見直し 新幼稚園教育要領を踏まえ、これまでの教育課程と指導計画を改訂する。		公開保育を行う。外部研修の伝達については、園内研修の時間を設け、園全体で周知していく。 **取り組んできたこと** 各学年のこども像を共通理解し、各期ごとに幼児の実態と内容を照らし合わせ、より幼児の生活に添った保育を行った。週案をもとにしながら振り返りを行い、日々保育の改善や指導計画に手直しを行った。今年度も就学への準備として年長児に大学の教室において、小学校の模擬授業を行った。 **今後の課題** コロナ禍前の行事や教育課程を実施することができるようになったが、引続き、安心・安全で充実した保育を継続していくかが課題となる。保護者の理解を得ながら、教育課程、指導計画の見直しが必要となると考えられるが、できるだけこれまでの実施してきた行事を行えるように検討していく。 また、就学前教育と小学校との連携、接続については、近隣小学校と交流が行えるように積極的に働きかけていきたい。 **具体的な取り組み方法** 教育課程の見直しは、教育課程会議の中で、検討していく。 また、行事については、余裕をもって、計画し実行していく。不測の事態にも対応できるようにしていく。 運動会やこどもてんらんかいにおいては、大人の参観の人数制限は設けず、学年参観は、2 日間を設定していく。年長の宿泊保育は、園で行う事としていく。 年長児の小学校との交流活動については、引続き実施していく。教員の小学校への運動会見学も引続き実施していく。
Ⅲ	大学・短大との連携 大阪成蹊大学、短期大学との連携を強め、保育についてじっくりと話し合い、幼児教育に対する考え方を共有する。	A	**取り組んできたこと** 学部や学科の教員との「保育研究会」を今年度は、２回実施することができ、各クラスの動画から分析を行い、次の取組につなげていくことができた。第１回は、公開保育を行い、その後の午後の分科会では、意見交換を行い示唆をいただいた。 また、正規の保育活動や課外保育の時間に、大学や短大の教員や学生と連携し、さまざまな活動を工夫し行ってきた。教育学部幼児教育コースでは、今年度も「ＰＢＬ授業」に協力し学生の学びを深めることができた。 **今後の課題** 次年度は、新たなテーマで「保育研究会」を年３回計画し、大学・短大教員の多くが参加できる体制で第２保育期には、公開保育も行う。ＰＢＬ授業への協力も引き続き行う。 また、教育実習以外でも学生が幼稚園現場を経験できる機会を設定していく ex：保育補助アルバイトや行事の補助 **具体的な取り組み方法** 短大や大学との連携をさらに深めながら、保育活動の充実を図る。年３回の「保育研究会」を実施し、公開保育を行う。また、併設校や短大・大学の学生の教育実習、体験学習を受け入れることでよりよい保育者になるための指導を担っていく。あわせて優秀な学生の採用につなげていく。また園行事への学生参加の機会や保育補助の機会をさらに増やしていく。

Ⅳ	安全管理 教職員が協力・連携をして、幼児の安全を守る体制を強化する。また、保護者と共に連携体制を再確認し、すべての幼児の命を守るという意識を高めていく。	A	**取り組んできたこと** 毎月の安全点検を実施し、避難訓練に関する年間計画を立て、教員と幼児・保護者も共に様々な状況を想定してほぼ１ヶ月に１回の訓練に取り組んできた。警察署との連携は実施できなかったが、消防署からは、消防車も出動し、避難訓練や教職員の消火訓練を実施できた。近隣小学校へ避難する訓練については、実際に小学校へ避難する訓練を行うことができた。 園児引き渡し訓練を昨年度に引き続き実施した。 **今後の課題** 大地震など大災害発生時に、園内で幼児が長時間待機する事になった場合の備蓄品(食料品・衣服・衛生用品など)の点検を行い、管理場所や物品の選定なども教員全体で共通理解を行う。次年度は、日程調整を行い、警察や消防署と連携して訓練を実施していく。 **具体的な取り組み方法** 安心・安全な園体制を構築していく。大きな災害を想定した避難訓練はもちろんのこと、毎月１回の避難訓練を継続して実施し、教職員の意識を高め、常に幼児の安全確保を最優先する体制の再構築を図る。施設や遊具・保育室の環境の安全点検を行い、事故のない安全な環境を設定していく。養護教諭からの指導を通じて、感染症の予防、健康や食への意識を高め、ケガや事故を予防するとともに、マニュアルを熟知し、事象が起きた時に、迅速に対応できるよう教員の意識や行動の向上を図っていく。

５．学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

１．新型コロナウイルスの取り扱いが変更になったが、教員のマスク着用、アルコール消毒、手洗い、うがい等の感染防止対策の中で保育活動を行ってきた。年間計画や行事予定の検討を行い、春の親子遠足や秋の遠足は、昨年度と変わらず、電車利用の混雑の時間帯をさけて、実施することができた。保護者の願いを考慮し可能な限り子どもたちが充実した活動が経験できるように、感染対策を行いながら保育や行事に取り組んできた。子ども達は、現在の状況を受け入れ、保育活動に意欲的に取り組む姿があった。年齢に応じた育ちの獲得をねらいとして、常に子どもの実態を把握し、保育に工夫と改善を重ね取り組んできた。運動あそびの研究も４年目となり、日常的に子どもが身体を動かして遊ぶことが保育室や園庭でも見られるようになり教員の環境設定も工夫できるようになった。教員研修においては、園内体制を整え、対面研修が復活し、可能な限り参加し学びを深めた。年々増える個別の支援が必要な子どもに適切な支援が行えるように、短大教員や大阪市私立幼稚園連合会からの派遣臨床心理士の園児観察を通じての助言や研修による学びによって個々の教員のスキルアップにつながっている。

２．幼稚園、短大、大学が互いの立場で連携し、保育の実践、学びの両面から専門性を深め、より良い保育、より良い保育者育成につながる取組を行ってきた。「保育研究会」を実施し、大学や短大教員が、園児の実際の姿を共有できる機会を設けることができ、「運動あそび」について学びを深めることができた。さらに、教員間の連携だけでなく、学部・学科の学生が子ども理解を得られる機会のために教育学部の PBL 授業は、有意義なものであった。運動会やもちつきの行事においては、学生のボランティアが活躍し学生アルバイトが日常の保育補助を担っている。今後も学生が、幼稚園現場を知る機会を増やしていく。

３．安全管理については、年間計画にそって火災や自然災害に備えた訓練を実施した。また、新型コロナウイルス、ケガや病気の予防と対策について養護教諭を中心に保護者への発信を行い、園児への予防教育を行った。今年度も津波や大雨等の想定で東井高野小学校への避難訓練を行うことができた。

４．次年度新入園児が、定員の 70 名を大幅に下回った。原因の分析と入園増に向けて、新たな地域への園児獲得等の対策が必要である。

６．学校関係者の評価

評価委員・幼稚園教員（園長・副園長・教頭・教務担当・研究担当）出席のもと、各学期ごとに年３回学校関係者評価委員会を行なった。委員会では「教育活動について」「教員研修について」「学園や諸機関との連携」等を柱に、スライドショーを提示しながら、幼稚園から幼児や保護者の様子、教職員の取り組みの経過と成果及び課題の報告を行った。その後、評価委員より意見や助言をいただくなど、評議の場を設けた。

今年度も総合的評価としては概ね良好であり、今後一層の保育内容の充実を期待する旨の意見を得た。主として以下の内容が挙げられた。

１．教育活動について

今年度は、新型コロナウイルス感染症の制限が緩和され、With　Corona から After　Corona への移行の中で、厳重な感染対策、密を避ける工夫の中で、教育活動や行事等を見直す好機として検討を重ね、園児の発達に合わせ一人ひとりに寄り添う細やかな配慮のもとでの保育活動を園全体で取組んでいたことは、十分評価できる。コロナ以前の行事が再開されたことはうれしい事であり、子ども達のようすを多くの行事の中で見ることができた。

しかし、After　Corona とはいえ、10 歳未満の新型コロナ感染者やインフルエンザ等の感染も広がる中で、引続き、安心・安全な保育を基本とし、平時に戻る移行期として感染症対策を徹底して慎重に対応していた。

取組んで４年目となる「運動あそび」は、年々研究を重ね、系統的なカリキュラムのもとでの活動は、効果的な成長につながったものと考えられる。また、カリキュラムがあれば、子ども達の達成度がわかり、次の活動につなげることができる。「運動あそび」についての報告は、保護者として学びになり、改めて子どもの成長の素晴らしさを感じることができた。身体を動かすことが楽しいという事が、さらに子ども達に実感できるようになればと考える。

補助アルバイトが増え、担任の負担が減る方法はないものかと考える。また、行事においてもアルバイトの積極的な活用が望まれる。

２．教員研修について

子ども達の実態、現状に即した保育、また、子ども達と共に作り出す保育実践をめざし、園内研修を通して定めた研究テーマとその実践効果検証から共通認識として幼児理解を深めるとともに必要な改善に努めている。また、外部研修、公開保育等を通して、客観的な視点で教育を見直し、常に保育の質を高め、教員の資質向上に努めている体制は、成果として、現れている。

教員の研修の成果が、さまざまな行事や日常の保育活動のきめ細やかな保育に表われている。

研究テーマにそって研究を継続していくのは、日常の保育活動がある中で多忙ではあったが、研究を推進していた。

WEB 研修などを取り入れるのも、良いのではないかと考える。

公開保育を実施し、ざまざな保育に対する意見や考え方を共有することは、今後の保育に活かしていくことができる。

３．学園や諸機関との連携について

大阪成蹊大学・短期大学と連携ができることは、本園の強みであり、子ども達にとって多くの体験・経験の場となっている。

大学・短期大学教員等との「保育研究会」や「公開保育」を通して互いの立場で連携し、互いに専門とする保育の研究・実践・学びの両面からのアプローチにより、専門性を深めることができる。

大学・短大教員との連携のみならず、PBL 授業への協力、教育実習、体験活動など大学、短大の教育課程に組み込まれており、幼稚園教諭をめざす学生にとっては、貴重な学びの場となっている。

４．安全管理について

今までの園内での徹底したウイルス感染防止の取組にあわせて、日常の施設、遊具の安全点検の実施、災害による様々な状況に対応するための１ヶ月に１回実施された避難訓練、近隣小学校への避難訓練や保護者、消防署、警察との連携などの対策は、日常の事故防止、災害時の適切な行動、園児の災害に対する意識付けにつながり、常に園児の安全を最優先する安心・安全な保育活動として重要であり、評価できる。

日々の訓練が非常に大切である。

災害から園児の命を守る立場にある保育者の意識や行動が重要である。常に園児の安全を確保する心掛けが大切である。

非常食の試食を体験してみてはどうか。

５．その他

１年間 PTA 会長として幼稚園と携わることができ貴重な経験ができた。園の教育活動をより深く知ることで、安心してわが子を預けることができた。これまでと変わらないのびのびした保育活動、生活の中から学ぶという教育方針にわが子を預けることができて良かったと心から感じた。

通常の質の高い保育活動、行事のみでなく、スポーツや英会話、アトリエ活動等、また、花壇や動物の世話、さらに附属幼稚園としての強みである大学、短大の教員との様々な活動、学生との関わり等の多彩な保育活動は、園児にとって幅広い経験と知識の習得につながる大変貴重な取組であると考える。

子ども達を教育し育てる場、教員の養成、育成の場として、今後もさらに大学、短期大学の教員、学生、地域社会、関係機関との連携、つながりを深めて、子ども達にとってさらに魅力ある幼稚園になることを願っている。